

教 育 研 究 業 績 書

令和6年 8月 29日

氏名 植杉 優一 印

研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド	
社会医学/応用健康科学/健康・スポーツ科学		健康増進/予防医学/加齢・老化/ヘルスプロモーション/スポーツ栄養	
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項			
事項		年月日	概 要
1 教育方法の実践例 1. 実習形式での授業展開		平成27年4月 ～現在	グループワークや動画の視聴、実際に身体を使った授業を取り入れ、学生が興味をそそり、飽きない授業づくりを心がける。
2. 授業アンケートの実施		平成27年4月 ～現在	毎回の授業終了時に、授業アンケートを実施することで、学生の授業の理解度や授業に対する意見を確認し、随時授業の改善に取り組んだ。
3. 管理栄養士国家試験を見据えた授業展開		平成28年4月 ～現在	資格試験対策の予備校講師の経験を活かし、管理栄養士国家試験を分析。出題傾向や頻出単語について、より細やかに説明を行っている。
4. WEB授業への対応		令和2年4月 ～現在	WEB形式の授業に対応するために「ZOOM」でのオンライン授業や「YouTube」でのオンデマンド配信を実施した。また、Googleのアプリである、「classroom」を活用して、出欠やレポート提出の管理を行った。さらに、「Google Forms」で、アンケートや小テストを実施している。
5. 授業内容をSNSで公開		令和4年4月 ～現在	学生の作成した強化献立を学園のSNSに投稿した。投稿用の料理の作成から、写真の撮影、画像の編集、文章の作成まで全て学生の手によって作成させた。

2 作成した教科書、教材 1. 授業内容のレジュメ・スライドおよび事前事後学修用の教材（復習プリント、授業アンケートカード）の作成	平成27年4月～現在	授業内容を伝えるためのレジュメとスライドを作成し、事前事後学修用の教材（復習プリント、授業アンケートカード）を作成した。
3 教育上の能力に関する大学等の評価 1. 授業評価アンケート	平成28年3月	平成27年度の森ノ宮医療大学（科目：スポーツバイオメカニクス）の学生の授業評価アンケートの結果、授業内容にたいへん満足という回答が100%（31/31人）を占めた。
4 実務の経験を有する者についての特記事項 1. 研究室の学部生・大学院生への研究指導	平成29年4月～現在に至る	武庫川女子大学の公衆衛生学研究室、栄養科学研究所に所属し、毎年6名程度の卒論生および大学院生に対して、研究計画の立案方法、調査法、統計解析法、論文の執筆等について指導を行った。
5 その他 なし		
職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 資格、免許 1. 栄養士免許 2. 管理栄養士免許 3. 修士（スポーツ科学） 4. 公認スポーツ栄養士 5. 博士（食物栄養学） 6. JAAF公認ジュニアコーチ（陸上競技コーチ1）	平成23年3月 平成23年6月 平成25年3月 平成29年10月 令和4年3月 令和4年4月	登録番号：兵庫県 第52036号 登録番号：第162178号 武庫川女子大学大学院 第5号 論文題目「女子カヌースプリントにおける筋電図的研究」 登録番号：第0418947号 武庫川女子大学大学院 乙第95号 論文題目「介護予防を目的とした若年期から壮年期における一次予防の必要性に関する研究」 登録番号：第0418947号
2 特許等 なし		
3 実務の経験を有する者についての特記事項 1. 大阪大学との共同研究 2. 愛媛大学客員研究員	平成31年4月～令和4年3月 令和元年9月～現在	大阪大学と武庫川女子大学との共同研究である、「日本人オリンピック代表選手コホートにおける健康寿命とセカンドキャリアに関する研究（JOLY Cohort Study）」において、元オリンピック選手である、金村氏や浅原氏と共に、引退後のオリンピックの実態調査を行っている。 愛媛大学東温スタディにおいて、客員研究員として、身体活動量質問紙（JALSPAQ）の解析、データ分析および論文執筆を担当している。
4 その他 1. 【報告書】平成25年度 富田林市健康づくり・地域ネットワーク推進事業「富田林ウォーキングサポーター養成講座」講師 2. 【報告書】平成26年度 摂津市健康づくり・地域ネットワーク推進事業「ウォーキング推進リーダー養成講座」協力委員 3. 【報告書】平成28年度 熊取町ヘルスアップ推進員養成研修事業「ココカラびんびん！元気リーダー養成講座」講師	平成26年3月 平成27年3月 平成29年3月	（発行：大阪府国民健康保険団体連合、執筆担当箇所：p12-36）講座にて食事調査、栄養指導を実施し、前後における身体組成及び身体活動量、歩数、食事摂取量の変化に関して報告書をまとめた。 （発行：大阪府国民健康保険団体連合、執筆担当箇所：p31-36）講座前後における身体組成及び身体活動量、歩数の変化に関して報告書をまとめた。 （発行：大阪府国民健康保険団体連合、執筆担当箇所：p9-30）講座にて食事調査、栄養指導を実施し、講座前後における身体組成及び身体活動量、体力、歩数、食事摂取量の変化に関して報告書をまとめた。

4. オープンキャンパス実行委員	平成29年4月 ～令和4年3月	2019・2020年では実行委員長として、新学科を宣伝するために、新たなオープンキャンパスの企画を立案、実施した。特にコロナ禍において、YouTubeやInstagram、ZOOMなどを駆使し、学部説明会のLIVE配信、オリジナル動画の配信などに取り組んだ。また、学部パンフレットの作成においても、一端を担った。
5. 【報告書】平成30年度 寝屋川市健康づくりグループの養成研修事業「自分で健康プロデュース～スラッとボディ！シェイプアップ講座～」講師	平成31年3月	(発行：大阪府国民健康保険団体連合、執筆担当箇所：p12-21) 講座にて食事調査、栄養・指導を実施し、講座前後における身体組成及び身体活動量、体力、歩数、食行動の変化に関して報告書をまとめた。
6. 第23回日本運動疫学会学術総会 事務局長	令和3年6月26・27日	(編集：第23回日本運動疫学会学術総会講演集) コロナ禍で1年の延期を経て、対面とオンライン配信を併用したハイブリッド型学会を業者に頼らず開催した。また、特設サイトの作成、運営も実施し、シンポジウム、特別講演、一般口頭発表などをオンデマンドにて配信した。さらに、講演集の編集を行った。

研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) なし				
(学術論文) 1. 成人における年代別・性別の共食頻度と生活習慣、社会参加および精神的健康状態との関連	共著	平成27年6月	日本栄養改善学会『栄養学雑誌』73巻6号243-252頁	赤利吉弘、小林知未、小林千鶴、 <u>植杉優二</u> 、内藤義彦 大阪府S市の成人2000人を対象に共食頻度と生活習慣、社会参加および精神的健康状態の関連について検討した。共食頻度は20・30歳代の男性で最も低く、男性に比べて女性が有意に多く「週10回以上」家族と共食していた。また、共食頻度は20・30歳代の女性が「ストレス」、40・50歳代の男性が「夕食開始時刻」、女性が「就寝時刻」「喫煙」、60歳以上の男性が「夕食開始時刻」「喫煙」、女性が「受動喫煙」「社会参加」とそれぞれ関連しており、性別、年齢別で共食への阻害要因は様々であった。よって、共食の推進には、年齢や性別の阻害要因・促進要因に配慮した施策が必要と考えられる。（調査、解析を担当）
2. 軽症糖尿病性末梢神経障害患者の歩行における足圧と下腿筋電図の特徴	共著	平成28年12月	日本健康体力栄養学会『日本健康体力栄養学会誌』21巻1号1-12頁	<u>植杉優二</u> 、中西増代、中西康人、松島正知、伊東太郎 足部潰瘍のない軽度の糖尿病性末梢神経障害患者14名を対象に歩行中の下肢筋電図（EMG）および足圧を測定した。その結果、EMG様相は運動神経系の異常がすでに現れており、3パターンの異常足圧が認められた。よって、DM患者には潰瘍予防の観点から、歩行の運動指導によって異常足圧の改善を行う必要があると考えられる。
3. トランポリン競技の踏切における筋活動と滞空時間との関連	共著	平成29年12月	兵庫体育・スポーツ科学学会『体育・スポーツ科学』第26号31-36頁	松島正知、中西増代、中西康人、 <u>植杉優二</u> 、矢野澄雄、伊東太郎 ハイレベル群3名（ワールドカップ日本代表経験者）とミドルレベル群7名（全日本選手権大会レベル）を被験者とし、ストリートジャンプにおける筋電図と映像を同時記録し、踏切時の筋活動様相から滞空時間を延ばすための筋作用機序を探ろうとした。その結果、ハイレベル群は踏切前半の局面における脊柱起立筋、大腿直筋、腓腹筋の筋活動が各々大きいほど滞空時間が長くなる傾向が認められた。特に2015年ナショナルS指定強化選手の滞空時間は、これらの筋群との間に高い重相関係数を示し、踏切時の身体各部位の連動が高い跳躍に必要であることが確認された。（調査を担当）
4. 若年女性のロコモティブシンドロームの実際ーロコモ度テストの結果と身体特性および食習慣・生活習慣との関連ー	共著	令和元年10月	日本健康支援学会『健康支援』第21巻2号1-12頁	<u>植杉優一</u> 、内藤義彦 女子大学1年生222名を対象にロコモ度テスト、食物摂取頻度調査および身体活動量質問調査を実施し、ロコモティブシンドロームのリスクの実態を探ると共に食事、身体活動との関連について調査した。その結果、ロコモのリスクを有する者は26.6%認められ、高リスク群は摂取エネルギー量が有意に低く、3メッツ以上の身体活動量も有意に低かった。女子大学生の中に、ロコモのリスクを有する者を一定数確認し、生活習慣との関連が大きいと示唆された。よって、ロコモのリスク低減には若年期からの対策が必要である。

5. Influence of insulin resistance on the association between physical activity and heart rate variability: the Toon Health Study	共著	令和2年9月	“Journal of Physical Activity & Health” 17(11), pp. 1075-1082	Saito I, Maruyama K, Kato T, Takata Y, Tomooka K, Kawamura R, <u>Uesugi Y</u> , Naito Y, Osawa H, Tanigawa T 30～79歳の男女2016人を対象に、身体活動量調査、座位の心拍数（HR）と心拍変動（HRV）を検出し、周波数領域および時間領域の指標を算出、空腹時の血糖値とインスリン値によりホメオスタシスモデル評価指標（HOMA-IR）を用いてインスリン抵抗性を評価した。その結果、身体活動量の低下は、HRの上昇とRMSSDおよびpNN50で表される副交感神経系の活動の低下と関連することを明らかにした。両者の関連は、インスリン抵抗性によって修飾されないことが示唆された。（身体活動量の解析を担当）
6. The Relationship between Locomotive Syndrome Risk, Gait Pattern, and Standing Posture in Young Japanese Women: A Cross-Sectional Study	共著	令和2年12月	“Healthcare” 2020, 8, 565	<u>Uesugi Y</u> , Kanaya S, Nakanishi H, Naito Y 女子大学生100名を対象にロコモ度テスト、歩行テストや立位姿勢の美しさを調査し、ロコモティブシンドロームのリスクの実態と歩行および姿勢との関連について調査した。その結果、ロコモのリスクが高い者は、低い者と比較して、最大歩行速度が遅く、円背である傾向が認められた。また、中高生の運動部に所属していない者が有意に多かった。大学生の時から運動習慣、歩行や姿勢への配慮はロコモのリスクの軽減になり得ると示唆した。
7. 高校生陸上競技選手に対するおにぎりによる補食の有用性	共著	令和3年1月	日本スポーツ栄養学会『日本スポーツ栄養研究誌』第14巻1号	<u>植杉優一</u> 、内藤義彦 高校陸上競技部所属の選手男女50名を対象に、学年・性別・競技種目をもとに2群への層化無作為割付けを行い、一方の群に3カ月間の介入を実施した。介入内容は部活動終了直後のおにぎりの摂取であった。その結果、介入後にVO2maxの有意な増加及びVT出現時間の延伸が認められた。運動終了後のおにぎりの摂取は、パフォーマンス向上に寄与する可能性が示唆された。
8. A Cross-Sectional Study of the Relationship of Timed Up & Go Test with Physical Characteristics and Physical Activity in Healthy Japanese: The Toon Health Study	共著	令和3年7月	“Healthcare” 2021, 9, 933	<u>Uesugi Y</u> , Maruyama K, Saito I, Tomooka K, Takata Y, Kawamura R, Osawa H, Tanigawa T, Naito Y 要支援・要介護のない男女811名(30-84歳)を対象に、フレイル等の診断に用いられるTUGテスト、身体活動量質問紙(JALSPAQ)および身体組成を調査し、TUGの結果と身体活動量と身体組成との関連について性別、年齢区分別に検討した。その結果、64歳以下の男性では、TUGと仕事や家事の身体活動量に関連が認められ、65歳以上では骨格筋量との関連が認められた。一方女性では、年齢区分に関係なくTUGと身長および運動量に関連が認められた。従って、TUGと身体活動には関連が認められ、男性では仕事や家事で身体活動量を上げ、骨格筋量を維持すること、女性では年齢を問わず運動量を上げることがフレイル、介護予防に繋がると示唆された。
9. Longitudinal changes in arterial stiffness associated with physical activity intensity: The Toon Health Study	共著	令和5年2月	“Journal of Atherosclerosis and Thrombosis” 31(2), pp. 171-179	Matsuo R, Ikeda A, Tomooka K, Naito Y, <u>Uesugi Y</u> , Maruyama K, Kawamura R, Takata Y, Osawa H, Saito I, Tanigawa T 1,982人の日本人男女を対象とした前向きコホート研究を実施し、動脈硬化の経時的変化に対する身体活動強度の影響を調べました。その結果、一定量の身体活動量は動脈硬化の予防に貢献することが示唆された。一方で、一定量の身体活動量より高い身体活動量であっても、量反応関係にはないことが示唆された。（身体活動量の解析を担当）

10. コロナ禍が女子大学生の ロコモティブシンドロームの リスクに与える影響 —2015年度入学生と2022 年度入学生との比較から —	共著	令和6年12月 予定 Accept：令和 6年7月25日	“CAMPUS HEALTH”, 61(2), 1 - 6, 2024	植杉優一、内藤慶彦 2015年と2022年の女子大学1年生452人を対 象に、ロコモティブシンドロームのリスク の実態を把握し、コロナ禍前後における生 活習慣の変化との関連について検討した。 その結果、2022年の学生ではロコモ高リス ク者は25%増加し、その要因として、身体活 動の減少および脂質摂取割合の増加があげ られ、コロナ禍を過ごした学生たちへの身 体機能維持・向上のためのサポートが必要 であると示唆された。
---	----	---------------------------------------	---	--

(その他) (学会発表等)				
1. 糖尿病性末梢神経障害患者の歩行における足圧と下腿筋筋電図の特徴（口頭発表）	共著	平成23年9月	第66回日本体力医学会（山口）	植杉優一、原千晶、伊東太郎 糖尿病性末梢神経障害患者14名と非患者7名、若年者8名における自然歩行時の下腿筋電図および足圧を測定し、関連を検討した。その結果、患者群で3つのパターンの足圧異常が認められ、最も異常な群では、下腿筋群の異常放電が確認された。
2. 女子カヌースプリント選手におけるアームエルゴメーター駆動時の筋作用機序について（口頭発表）	共著	平成24年3月	大阪体育学会50回大会（関西学院大学）	植杉優一、原千晶、山田咲貴、橋本千晶、伊東太郎 女子カヌースプリント選手11名を対象に、アームエルゴメーターを用いて、運動負荷試験を実施し、その際の無酸素性作業閾値（VT）、最高酸素摂取量および上肢・上肢帯筋群の筋活動を測定した。その結果、VT発言時に急激な筋活動の上昇が認められ、その筋は被験者によって異なるものであった。
3. 新体操のバランス課題におけるスキル差の一要因（口頭発表）	共著	平成24年3月	大阪体育学会50回大会（関西学院大学）	原千晶、植杉優一、伊東太郎 女子新体操選手20名を対象に、バランス動作時の床反力および下腿、体幹筋電図様相を確認し、関連を検討した。その結果、より有効なバランス試技が可能な選手の動作は片脚振上げ後の重心動揺が少なく、脊柱起立筋や中殿筋等の筋活動が活発であった。一方、大腿直筋の筋活動は低いことが明らかとなった。
4. 食事管理ノートを用いた女子カヌースプリント選手への栄養サポート（口頭発表）	共著	平成24年7月	第6回日本スポーツ栄養研究会学術集会（岩手）	植杉優一、山本一八、村上堯之、宮本芙美香、井上翔太、小貫佐知子、伊東太郎 女子カヌー選手を対象に、食事管理ノートを用いて、10か月間の食事介入を個別に実施し、適正体重を維持・改善を行った。介入前後の体重は、要減量群では3.4kgの減少、要増量群では1.6kgの増加が認められ、適正体重に迫る結果となった。また、朝食の欠食率が28.6%減少する等、食事の改善が認められた。本介入が選手個々の生活、性格および体調等に応じたサポートを可能にすると示唆した。
5. 女子カヌー実漕時における艇加速度と上肢帯および体幹筋活動との関連（口頭発表）	共著	平成24年9月	第67回日本体力医学会（岐阜）	植杉優一、原千晶、村上堯之、新井彩、小笠原一生、田中繁宏、伊東太郎 女子カヌースプリント競技選手16名を対象に実漕中のパドリングごとの加速度増加率（a/t）および上肢・上肢帯および体幹筋の筋電図様相を測定し、関連について検討した。その結果、a/tが一定の者は、大胸筋、広背筋および三角筋後部の筋放電量が増加する傾向が認められ、疲労しても筋活動を維持し続けていることが明らかとなった。
6. 女子新体操におけるバランスパフォーマンスと大腰筋断面積との関係（口頭発表）	共著	平成24年9月	第67回日本体力医学会（岐阜）	原千晶、植杉優一、宮本芙美香、伊東太郎 女子新体操選手19名を対象に腹部深層筋群をMRIで撮影した後、大腰筋断面積を算出し、バランス動作との関連を検討した。その結果、振上脚静止時によりバランスを保てる者は大腰筋断面積が大きく、特に振上脚側に、高い関連が認められた。

7. 疲労姿勢筋の連続投球動作中の回復に長期トレーニングが及ぼす影響（ポスター発表）	共著	平成24年9月	第67回日本体力医学会（岐阜）	伊東太郎、 <u>植杉優一</u> 、原千晶、森上真依 安静立位姿勢から全力でアンダーハンド投球動作を50回実施させ、ソフトボール投手群10名と非投手群7名を対象に予測姿勢調節筋である前脛骨筋の筋電図様相から、疲労の回復を確認した。その結果、投手群は疲労困憊後30秒ほどで回復が認められたが、非投手群の回復は約6分かかり、長期トレーニングの影響が認められた。
8. 大学女子ソフトボール選手におけるバッティング動作の筋電図的研究（ポスター発表）	共著	平成24年9月	第67回日本体力医学会（岐阜）	森上真依、宮本芙美香、村上堯之、松島正知、 <u>植杉優一</u> 、伊東太郎 大学女子ソフトボール選手10名に「線」と「点」の打撃動作を課した際の打撃フォームを2台のハイスピードカメラを用いて比較した。その結果、「線」の打撃はバッドを水平に寝かせ様々な球種に対応できるフォームであり、「点」の打撃ではダウンスイングで飛距離を出すフォームであることが明らかとなった。
9. 女子カヌースプリントにおけるスタートダッシュのバイオメカニクス的研究（口頭発表）	共著	平成26年3月	第52回大阪体育学会（近畿大学）	百畑美希、 <u>植杉優一</u> 、小笠原一生、伊東太郎 女子カヌースプリント選手におけるスタートダッシュ時の加速度、パドルの角度、上肢・上肢帯および体幹筋の筋電図様相を確認し関連を検討した。その結果、加速度が高い者ほど、パドルのリカバリー時間が短く、脊柱起立筋および広背筋等の近位筋の筋活動が活発であった。
10. 女子カヌースプリント実漕中の艇加速度と筋活動様相（口頭発表）	共著	平成26年9月	第23回日本バイオメカニクス学会大会（東京）	百畑美希、 <u>植杉優一</u> 、山下笑梨、松島正知、中西康人、中西増代、浅田鈴佳、木下博、伊東太郎 女子カヌースプリント競技選手ハイレベル者9名とミドルレベル者8名を対象に200m実漕中の加速度および上肢・上肢帯および体幹筋群の筋活動様相を測定し、群間比較した。その結果、ハイレベル群はミドルレベル群と比較して、推進方向の加速度が有意に高く、三角筋後部および広背筋の筋活動が有意に高かった。
11. 地域住民の身体活動量を確保・増加させるために地域行政・公共団体はどう関わるか（口頭発表）	共著	平成26年10月	第73回日本公衆衛生学会（栃木）	内藤義彦、小林知未、小林千鶴、赤利吉弘、 <u>植杉優一</u> 大阪府内の43自治体の取り組みの現状を把握するために、健康づくり担当者に健康づくり事業に関する簡易アンケート調査を実施した。その結果、健康づくり活動を活発化するために、地域のリーダーを養成している割合は27.9%、「運動しやすいまちづくり・環境整備」に関する事業を実施中の割合は30.2%、ウォーキングマップを作成している割合は62.8%であった。
12. 小学校区間での成人の食知識と児童の食習慣との関連について（ポスター発表）	共著	平成26年10月	第73回日本公衆衛生学会（栃木）	赤利吉弘、小林知未、小林千鶴、 <u>植杉優一</u> 、内藤義彦 一自治体の市民（成人1095人、児童3896人）を対象に、成人の食知識および児童の食習慣を調査し、小学校区間での関連について検討を行った。その結果、成人の食知識の高い地域ほど、児童における「野菜」や「乳製品」を習慣的に摂取する者の割合が有意に高く、地域の成人の食知識と児童の食生活には関連があることが明らかとなった。

13. 女子大学生におけるロコモの実態とその関連要因（口頭発表）	共著	平成27年3月	第53回大阪体育学会（大阪産業大学）	植杉優一、小林知未、赤利吉弘、内藤義彦 健康な女子大学生214名を対象にロコモ度テストおよび食・生活習慣及びロコモティブシンドロームの認知度に関して質問紙調査を行った。その結果、高リスク群は42.2%存在し、50%以上の者がロコモを認知していなかった。また、ロコモのリスクと中学生時の身体活動量や牛乳・乳製品との摂取頻度に関連が認められた。
14. 高校生陸上競技選手に対するおにぎりによる補食の有効性（口頭発表）	共著	平成27年9月	第70回日本体力医学会大会（和歌山）	植杉優一、小林知未、赤利吉弘、内藤義彦 高校陸上選手を対象に、運動終了直後に、より簡便に用意が可能である「おにぎり」を補食として摂取することの有効性を検討した。その結果、身体組成には有意な変化は認められなかったが、補食を行った群では、無酸素性作業閾値（AT）や有酸素性能力（VO ₂ max）の有意な向上が認められ、競技力向上に有効であると考えられる。
15. ラダリング法を用いた若年女性の食事選択動機に関する研究（ポスター発表）	共著	平成27年10月	第74回日本公衆衛生学会（長崎）	小林知未、小林千鶴、植杉優一、赤利吉弘、湊聡美、内藤義彦 若年女性を対象に食事選択行動とその価値意識との関連を明らかにし、食事を選択する際に影響を及ぼす動機の検討を行った。その結果、食事選択の価値意識は楽しさ、時間、美容、健康、経済性に分類され、時間を重視している者は嗜好飲料等の摂取量が少なく食事にゆとりがなかった。
16. 女子大学生におけるロコモティブシンドロームの現状とその関連要因（口頭発表）	共著	平成28年10月	第71回日本体力医学会大会（岩手）	植杉優一、内藤義彦 健康な女子大学生222名を対象にロコモ度テストおよびFFQ等の質問紙調査を実施し、ロコモティブシンドロームのリスクと身体組成、食・生活習慣との関連について検討した。その結果、高リスク者を26.6%認め、低リスク者と比較し、三大栄養素、CaおよびFeの摂取量が有意に低かった。
17. 学校区間における児童の「早寝早起き朝ごはん」の実態と生活習慣・食習慣との関連（ポスター発表）	共著	平成28年10月	第75回日本公衆衛生学会（大阪）	赤利吉弘、小林知未、小林千鶴、植杉優二、中西尋子、内藤義彦 10校、4896名の児童を対象に学校区間における早寝早起き朝ごはんの生活リズムを比較すると共に、生活習慣・食習慣との関連について検討した。その結果、学校区間によって児童の生活リズムは異なり、早寝早起き朝ごはんが実施できている児童の多い学校では、望ましい生活習慣・食習慣を身につけている児童が多く認められた。
18. 中学生における朝食の栄養バランス及び摂取食品と不定愁訴との関連について（ポスター発表）	共著	平成28年10月	第75回日本公衆衛生学会（大阪）	小林千鶴、小林知未、植杉優一、赤利吉弘、内藤義彦 中学生2533名を対象に不定愁訴と朝食の内容及び栄養バランスとの関連についてアンケート調査を行った。その結果、「めまい」や「疲れ」の項目と「主菜の摂取頻度」などに関連が認められた。
19. 高齢者における運動機能と身体状況及び生活習慣との関連（ポスター発表）	共著	平成29年10月	第76回日本公衆衛生学会（鹿児島）	中西尋子、小林知未、植杉優一、内藤義彦 女性高齢者25名におけるロコモティブシンドロームのリスクと立位姿勢及び歩行動作、身体状況、生活習慣等との関連について検討することを目的とした。その結果、ロコモ予備軍が76%を占め、ロコモのリスクが高い者ほど、前傾姿勢になる傾向が認められた。

20. 小学生を対象とした食生活と健康行動との変化～質問紙調査による平成25年と平成29年との比較～（ポスター発表）	共著	令和元年9月	第66回栄養改善学会（富山）	射場百花、赤利吉弘、 <u>植杉優一</u> 、小林知未、内藤義彦 一自治体の健康づくり計画の策定時及び中間報告時（4年後）に実施した児童を対象とした質問紙による全数調査の結果を比較し、児童の食生活と健康行動の4年間の変化について評価を行った。その結果、低学年、高学年朝食の摂取頻度、共食の頻度の低下やゲーム時間の延伸が認められた。
21. 健康づくりグループの養成を考える（第2報）－グループの設立と継続するための要因（ポスター発表）	共著	令和元年10月	第78回日本公衆衛生学会（高知）	中西尋子、内藤義彦、 <u>植杉優一</u> 養成事業により結成された健康づくりグループに所属している者15名を対象に、質問紙調査及びインタビュー調査を実施し、グループの設立に至る経緯やグループ活動の継続要因を明らかにすることを目的とした。その結果、「人と人の繋がり」による「生きがい」が継続の要因であることが明らかとなった。
22. 健康づくりグループの養成を考える（第1報）－養成講座参加者のフォロー結果より（ポスター発表）	共著	令和元年10月	第78回日本公衆衛生学会（高知）	内藤義彦、中西尋子、小林知未、 <u>植杉優一</u> 平成17～26年に大阪府内の自治体および大阪府国民健康保険団体連合会の共催より実施した健康づくりグループの養成事業に参加した住民430名に対し質問紙調査を実施し、地域活動への取り組みの実態を明らかにした。その結果、地域活動参加者で年齢が有意に高く、地域活動が高齢者により支えられている現状が明らかとなった。
23. 学童期におけるゲームに費やす時間と食生活・生活習慣との関連（ポスター発表）	共著	令和元年10月	第78回日本公衆衛生学会（高知）	射場百花、赤利吉弘、 <u>植杉優一</u> 、内藤義彦 一自治体の児童3524名を調査対象として設定し、ゲーム時間と食生活および生活習慣との関連を明らかにすることを目的とした。ゲーム時間1日2時間以上の児童は、男子44.1%、女子23.0%であり、男女ともに朝食の有無、野菜、間食等の頻度とゲーム時間に有意な関連を認めた。
24. 若年女性における立位姿勢・歩行指標とロコモティブシンドロームとの関連について（ポスター発表）	共著	令和元年10月	第78回日本公衆衛生学会（高知）	<u>植杉優一</u> 、中西尋子、内藤義彦 女子大学生100名を対象にロコモ度テスト、歩行テストや立位姿勢の美しさを調査し、ロコモティブシンドロームのリスクの実態と歩行および姿勢との関連について調査した。その結果、ロコモのリスクが高い者は、低い者と比較して、最大歩行速度が遅く、円背である傾向が認められた。
25. オリンピック日本代表選手コホートにおける健康状態とセカンドキャリアに関する研究～傷病と身体活動に着目して～（口頭発表・オンデマンド）	共著	令和3年6月	第23回日本運動疫学会学術総会（兵庫）	金村祐美子、喜多村祐里、竹内太郎、 <u>植杉優一</u> 、内藤義彦、祖父江友孝 現役および引退後の日本のオリンピック4,464名を対象に現在の健康状態、生活習慣の実態について調査した。調査参加者は268人であった。その結果、オリンピックは男女ともに一般人と比較して、外科的な通院率が有意に高かった。また、身体活動量が有意に高かった。
26. 大学生における口腔保健行動の現状と集団への効果的な歯科保健啓発の検討（ポスター発表・オンデマンド）	共著	令和4年9月	第17回日本歯科衛生学会（徳島）	北林珠奈、 <u>植杉優一</u> 、内藤義彦 大学生における口腔保健行動の現状を把握するために女子大学生約8,000名を対象に、歯科に関する知識・意識についてのアンケート調査を実施した。調査参加者は1,680人であり、回答者の56.4%が自分の歯の状態を気にしていることを明らかにした。しかし、67.6%が外出先でのブラッシング習慣が無い状態であった。

27. 健常者におけるTimed Up & Go Testと身体特性及び身体活動量との関連：東温スタディ（ポスター発表）	共著	令和4年10月	第81回日本公衆衛生学会（山梨）	植杉優一、丸山広達、斉藤功、友岡清秀、谷川武、内藤義彦 介護状態でない、30歳以上の男女811名を対象に動的バランス・歩行能力・フレイルを評価できるTimed Up & Goテストを実施し、生活習慣との関連を検討した。その結果、男性では仕事や家事での身体活動量と、女性では運動量との関連が認められ、習慣的な生活活動においても、フレイル予防に関与する可能性が示唆された。
28. 大学生における口腔保健行動の現状と集団への効果的な歯科保健啓発の検討～大学生の歯科健診から見た課題解決について～（ポスター発表）	共著	令和4年10月	第81回日本公衆衛生学会（山梨）	北林珠奈、植杉優一、内藤義彦 大学生における口腔保健行動の現状を把握するために女子大学生約8,000名のうち希望した102人を対象に歯科検診を実施した。その結果、全体の23.0%が要指導、29.0%が要精密検査と診断された。よって、大学生への歯科検診の必要性が示唆された。
29. 若年女性におけるロコモティブシンドロームと口腔機能との関連について	共著	令和5年11月	第82回日本公衆衛生学会（茨城）	植杉優一、北林珠奈、内藤義彦 女子大学生230人を対象に大学生における咬合力とロコモティブシンドロームの関連について検討した。その結果、ロコモリスク高群は咬合力が有意に低く、肉や淡色野菜、果物等の摂取量が低い傾向にあり、かたい食べ物を避ける傾向にあることが示唆された。